

## 四国の山村とグアテマラ

藤井満

1988年から89年にかけて中米諸国を歩いたとき、グアテマラにも1カ月ほど滞在した。極彩色の織物をもとめて村々をたずね、夜はバーでビールを飲んでバカ騒ぎをする。内戦は山奥のごくごく一部にあるだけで、もはや住民生活には関係がないと思っていた。日本政府も私と同じ程度の認識だったのだろう。エルサルバドルやニカラグアでは内戦のため休止していた青年海外協力隊がグアテマラには派遣されていた。

代表的観光地であるアティトラン湖のほとりのサンティアゴ＝アティトランという町で「内戦時代は大変だったでしょう？」などとマヤの人々にたずねてまわったことがある。

「昔はね」「まあまあね」……

遠慮がちにこたえ、いつのまにかとりとめもない話になり、背をむける。彼らがひかえめで、無口で、閉鎖的なのは、マヤ民族の特徴かなと思った。

そのうち「戦争のないグアテマラ」が退屈になり、刺激をもとめてエルサルバドルとニカラグアに飛び出した。

3年後の91年12月、コナビグアの共同代表の1人、ロサリーナ＝トゥウククさんが来日する。私が滞在したホテルから100メートルとはなれていない街角で、ほぼおなじ時期に、凄惨な虐殺やリンチがあいついでいたことを彼女の口から知らされる。

なぜ私は現場になった村や町に足をはこびながら、悲劇の片鱗にすら気づかなかったのだろうか。

92年、グアテマラを再訪した。4年ぶりのサンティアゴ＝アティトランは、風景は変わらないのに、人々の表情はぜんぜんちがう。「ブエノスディアス！」とあいさつをするとニコリと笑って返事がかえってくる。みんな人なつこい。

パイパイやマンゴを売るおばさんに「町の歴史を教えて」と話しかけると、だれもが1年前に軍の駐屯地を追いだした経験を語ってくれた。

「観光客がきても、軍がこわくてとても本当のことは話せなかった。今は軍がいなくなったし、こうして君にしゃべることができる。自由っていいなあって実感してるよ」

案内してくれた23歳の男は話した。「自由」という言葉が、その言葉以上に重くかんじた。

だが九二年現在、軍の暴力から解放されたサンティアゴは例外中の例外だった。人権団体や労働組合などの活動家たちは暗殺の恐怖にさらされていた。ロサリーナは最大の暗殺の「標的」のひとりだった。

首都の下町にあるコナビグアのオフィスをたずねると、20メートルほど離れた十字路に停まっている真っ黒なガラスの車をしめして

「コナビグアの事務所もああやって監視されているのよ。運動がもりあがるにつれて暗殺もふえて、私も脅迫を受けている。この時間じゃ外にはでられないよ。外国人もあぶないから夜は気をつけてね」とロサリーナは言った。

以来、2000年まで1、2年に一度、グアテマラを訪問してきた。

秘密墓地の発掘がすすみ、難民が帰還をはたし、マヤ民族の組織がはじめて大統領選・国会議員選に参加し、日本人観光客の殺害事件が起き……。

この間、なぜロサリーナたちは命の危険をおかしてまでたたかいつづけられるのか、と考えてきた。

エルサルバドルのFMLNやニカラグアのFSLNは軍に対抗する力を持ち、社会主義などの「展望」があった。それに比べると、グアテマラのマヤの人々の置かれた状況は絶望的としか言いようがない。社会主義的な「展望」があるようにも思えなかった。

2002年から3年間、四国の山村を歩きまわった。

市町村合併という新自由主義的な政策に翻弄される山村には年寄りだけがこされ、集落が次々に消え、「さだめじゃ」といったあきらめの声が蔓延していた。

一方、そんななかでも、生き残ろうともがくヒトやムラもわずかに存在している。そうした元気なムラの背景には、戦後直後の公民館運動・青年団運動の経験があった。さらにその基盤には、明治の自由民権運動以来の流れをくむ生活綴り方運動や、アメリカのリベラリストがもたらしたプラグマティズムが垣間見えた……

なーんだ、中米と一緒にじゃないか、と思った。市場経済に翻弄される状況はもちろん、それに対抗する運動の背後にあり、「あきらめ」を「課題」に転じることを説くパウロ＝フレイレの思想とそっくりだ。

「われらは土をいじってないと生きていけないのじゃ。街にでたら根っこがなくなるんじゃ」という山村のおばあさんの土着の強さが、「さだめ(あきらめ)」を「課題」に転じる思想と結びついたときに、きびしい環境を前向きに生き抜く力を生みだしていた。

愛媛の山の集落で一人暮らしをつづける90歳のおばあさんの穏やかな笑顔と、ニヒヒヒというロサリーナのはにかみがちの表情が、なぜか最近だぶって見えてならない。

-----

四国の山村の話は「消える村生き残るムラ」(2006年、アットワークス)に書きました。よかったら御覧ください。